

1K09B223-0 渡辺慎也

主査 岡田純一先生 副査 菊地真也先生

I 緒言

中学校、高等学校の部活動について、学習指導要領には、生徒の自主的、自発的な参加により行われるものと記載されている。中学生、高校生の運動部への参加理由について、文部省が平成8年に全国の中学校、高等学校それぞれ100校の生徒、保護者、教員など計約5万4千人を対象に実施した「中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査」によると、運動部に所属している生徒の半数近くは、そのスポーツを楽しみたいという理由で運動部に参加している。一方、このような部活動の意義または参加の理由に関わらず、在学中あるいは卒業後にスポーツから離脱していく生徒は少なくない。運動部活動がより意義ある課外活動になっていくためには、運動部活動への参加がスポーツからの離脱のきっかけになるのではなく、豊かなスポーツライフの実現に向けた基盤を形成するものになることが望ましい。そのためには部員の向上意欲を高めていくための指導が重要だと思われる。そこで本研究では運動部活動に対する向上意欲のメカニズムを動機づけの観点から検討し、指導者が部員に部活動の動機づけを高めるための指導の指針を策定する。

II 動機づけ

スポーツ参加における動機や欲求は全て同じように機能しているわけではない。例えば達成動機が強い人がいる一方で、親和動機が強い人もいるというように、参加動機の質と量の違いがスポーツへの動機づけの個人差となって表れる。チームの雰囲気に対する判断ひとつをとってみても部員個々に評価が異なることから、運動部の指導や運営にあたっては、個人の属性や過去の経験等を考慮し、画一的とならぬよう注意する必要がある。いずれにしても、スポーツは多様な動機や欲求に支えられていること、そして、それらの動機や欲求がスポーツ場面でどの程度充足されているかがスポーツへの動機づけを左右していると考えられる。指導者の立場からは、選手の多様な欲求をどのように充足させていくのが重要である。

III 目標

Banduraの自己効力理論により、中程度の目標設定と具体的な目標設定と短期目標の設定が有効であ

る。難易度の高い目標では自己効力感が高まることが明らかにされている。同様のことは、期待価値理論からも説明できる。この理論によれば、主観的な成功の可能性が50%の目標が最も動機づけを高めることができるとされている。自己効力理論によると、目標とフィードバックの両方が得られた時に自己評価が可能となり、自己効力感が高まり遂行が促進されることが示されている。また、短期目標はフィードバックが早く得られるため、自己効力感の情報源となり、自己効力感を高めることを指摘している。短期目標はパフォーマンスを評価する機会を早期に与え、長期目標に対する動機づけを高めることを指摘している。正確なフィードバックを得るためには、より具体的な目標を設定する必要がある。

IV 原因帰属

心理学では、成功や失敗などの出来事の原因を求めることを原因帰属という。成功・失敗経験の原因を努力に帰属させることによって、スポーツへの動機づけが高まり、スポーツが継続される。また、失敗の原因を能力に帰属すると、動機づけの低下をもたらす、さらには無力感の獲得に繋がる。

V 動機づけ雰囲気

動機づけ雰囲気は、個人が集団に存在していると認知する目標志向性のことで、集団が熟達目標を重視する時に見られる熟達雰囲気と、集団が成績目標を重視する時に見られる成績雰囲気に大別される。スポーツなどの達成場面の動機づけは、指導者、仲間、クラスといった環境の影響を受けている。熟達雰囲気をもたせることが、個人の動機づけを高める上で重要になる。指導者が生徒や選手の学習の成果を重視して、他者との比較を中心として評価することにより、成績雰囲気をつくり出してしまう。一方、指導者が生徒や選手の学習の仕方を重視して、どのくらい上達したかといった評価を行うことにより、熟達雰囲気が形成される。

VI 結論

指導者が部員自身の動機づけを高めるためには、達成可能であり、なおかつ、困難で具体的な目標を設定させ、また、成功や失敗の原因を能力ではなく努力に帰属させる指導が有効であると結論された。